

令和3年度第2回門真市総合教育会議議事録

日 時：令和4年2月22日（火）午後3時00分から午後4時15分まで

場 所：門真市役所本館4階 委員会室

出席者：宮本市長、久木元教育長、土川教育長職務代理者、高橋委員、松宮委員、澤田委員

関係者：下治副市長、三原副市長、邊田副教育長、鈴木教育部長、峯松教育部総括参事、十河教育総務課長、湯川教育企画課長補佐、植原学校教育課参事兼教育センター長、川谷学校教育課参事、笹井保育幼稚園課長

事務局：宮口企画財政部長、北井企画財政部次長、高田企画課長、船木企画課長補佐

（事務局）

それでは定刻となりましたので、会議を開催させていただきます。本日はご多忙の中、令和3年度第2回門真市総合教育会議にご出席いただきありがとうございます。本日司会を務めます、企画財政部企画課長の高田でございます。よろしくお願いいたします。

はじめに、本日の会議は新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、ご出席の皆様にはマスクの着用をお願いしております。ご協力をよろしくお願いいたします。

本日の進行につきましては、資料の確認が終了するまでは、私の方で進めさせていただきます、その後、主宰者である宮本市長による議事進行となりますのでよろしくお願いいたします。

なお総合教育会議は法律により原則公開することとなっており、本日は公開で開催いたしますのでご了承のほどお願い申し上げます。

次に、本会議の構成員に変更がございましたので、構成員であります市長、教育長並びに教育委員の皆様をご紹介します
宮本一孝門真市長でございます。

続きまして教育委員会から、久木元秀平教育長でございます。

土川好子教育長職務代理者でございます。

高橋元委員でございます。

松宮新吾委員でございます。

澤田京子委員でございます

それでは議題に入ります前に、本日配付の資料の確認をさせていただきます。

- ・次第
- ・資料1 令和4年度授業改善及び学力向上に係る主な取り組みについて
- ・資料2 クロームブックの活用ステップ

- ・資料3 校務支援システム概要
- ・資料4 ICT活用事例
- ・資料5 第四中学校区新しい学校設立準備会・スクールツクール実施概要
- ・資料6 第四中学校区新しい学校づくりのスケジュール（予定）

の計7点となっております。お手元に全て揃っておりますでしょうか。揃っているようですので、これより議事の進行を宮本市長にお願いしたいと存じます。市長よろしく申し上げます。

（宮本市長）

皆さんお疲れ様でございます。ここからは、私の方で進めてまいります。本日は大変お忙しい中、また新型コロナウイルス感染者が増加傾向にある中ではありますが、令和3年度第2回門真市総合教育会議にご出席賜りまして誠にありがとうございます。

新型コロナウイルス感染症の対応につきましては、小中学校共に陽性者が出てきておりまして、濃厚接触者の特定など、教育委員会におかれましてはご尽力いただいているところであります。誠にありがとうございます。

本市といたしましては、感染拡大防止対策を全庁一丸となって進めているところでありまして、引き続き取り組んでまいりますので、よろしく願いいたします。

本日の開催につきましては、第1回の開催時にもお伝えしておりましたとおり、議会での議決前ではございますが、予算案を議会に提出したタイミングでの開催としております。

それでは、案件の「令和4年度に向けた意見交換について」に入らせていただきます。

令和4年度の予算内容につきましては、教育委員会事務局より皆様にご説明いただいておりますが、主な内容としましては、屋上防水改修をはじめ、学校生活に極めて重要となるトイレの改修、更には給食棟の空調設備設置を行うなど、安全・安心で衛生的な学校施設の整備。

また、学力向上推進のための体制構築、子どもの学びを止めない学習環境の充実に向けた学校のICT環境の整備。

学校適正配置につきましては、第四中学校区の義務教育学校建設に向けた費用等、令和4年度におきましても教育分野に引き続き重点的に予算配分をおこなっているところでございます。

それでは、私の方から1点目ですが、学力向上についてです。

令和5年度全国学力・学習状況調査での全国平均超えを目指して取り組んでおりまして、令和4年度に向けては、学力向上推進のための市独自の教員の追加配置など予算措置をさせていただいたところでございます。

目標達成に向けて、令和4年度は具体的にどのように進めていかれるのかお聞かせ願います。

(久木元教育長)

まず、新年度予算そして市長復活要望に格段のご配慮をいただきましてありがとうございます。この場を借りて、御礼申し上げます。

学力向上の推進策につきましては、植原学校教育課参事から説明いたします。

(植原学校教育課参事)

来年度は、アクションプランの取り組み2年目ということで、まず今年度の取り組みをさらに推進していくことが重要であると考えております。

まずは今年度の取り組みを簡単にご説明させていただきます。

今年度は2点。全小中学校の実態を客観的に把握するため、各種学力調査をより詳細に分析すること。そして、指導主事が学校訪問しながら、先生方と一緒に教員の授業力向上の取り組みを推進することに取り組みました。

さらに教育長はじめ、教育部幹部が全小中学校に年2回の学校訪問を実施するなど、学校との連携の強化に努めました。

成果といたしましては、学校長の学力向上への意識の高まり、各校において学校組織としての学力向上の取り組みが推進されていることが挙げられると考えております。

また、教育委員会として、同一集団における正当率の経年比較や、全国平均以上の子どもたちの割合、全国平均以下の子どもたちの割合など、より詳細な分析を実施したことで、学校訪問や授業参観時の、また学力向上に特化した学力向上担当者の会議の場においてなど、指導助言では数値を示しながら、具体的な授業改善の話ができたことが良かったと考えております。

なお、分析にはここにおられる松宮教授にもご協力いただいております。

その結果、学校教育診断におきまして、子ども対象のアンケート「授業はわかりやすく楽しい」の項目において、肯定的意見が昨年度79%から今年度85.5%と約6ポイントの上昇が見られました。

来年度は今年度の取り組みをさらに進化させようと考えております。

資料の1をご覧ください。

来年度は、学力向上推進教員を中心とした市費加配教員7名と府費加配教員4名、府費はまだ確定ではないのですが、計11名を小中11校に配置し、学力向上担当に位置づけ、今年度確立した各校の学力向上体制をさらに機能的に②③⑤に示したPDCAサイクルで取り組みを推進し、目標である令和5年度全国学力学習状況調査での全国平均越えを目指します。

そして学力向上に係る加配配置のない学校には、指導主事が週1回ないし、

週 2 回程度学校訪問を行い、学力向上体制や授業改善への支援を行う予定としております。

一方、学力向上アクションプランには、中長期的な取り組みも実施すると明記しており、教職員の授業力向上のため、先進校視察の実施や授業作り等の研修も充実させる予定をしております。

以上でございます。

(宮本市長)

はい、ありがとうございました。

それでは教育長並びに教育委員の皆様からご意見ございませんでしょうか。

松宮先生、分析いただいたということもありまして、お気づきになられたことも含めてご意見いただけたらと思います。

(松宮委員)

はい。昨年になりますけども、実施されました大阪府のチャレンジテスト。これは対象が中学校 3 年生であったわけですが、門真市内の全ての子どもたちの国語、算数、理科、社会、英語 5 科目、これの得点がどうであるかということ进行分析させていただきました。仮にですね、この 5 教科の合計点が 1 人の中学生の能力得点という、そういったものがあるかどうかは別にして、これまでいろいろ分析してきたんですけども、一昨年まではやはり学校間の格差が大きかったんです。すなわち、地域によってその差があるんじゃないか、先生方の膨大な努力ではどうしようもない地域差があったんじゃないかというようなことも言われていたんですけども、今回嬉しいことが一つありました。それが何かって言いますと、門真市内の中学校の全てのこの 5 教科を合計した点数の差に、統計的な有意差があるか検証しましたが、ありませんという結果が出てまいりました。すなわちどういうことかと言いますと、先ほど説明がありましたけども、門真市の授業作りベーシックいわゆる事業のモデルを示しながら授業の質を高めていこうと取り組まれてきたこの効果がですね、全ての学校において一定レベル以上の成績を取ることができるようなものになってきたのかなと。従って、これまで先生方の努力ではなかなか大変であったという地域間格差があるんじゃないかと言われていたようなものが、対象はあくまでも中学校 3 年生なんですけども、その教育の成果としては学校間格差がなくなったと。これは私もこれまで分析してまいりましたが、これはすごいことだということが一つ見えてまいりました。

ただし、それぞれの個別の科目に関して分析してみると、やはりちぐはぐな部分がある。そこはこれからどうしていくかということ、そういった一つのモデル、授業をこう行うという、いわゆる水平的画一化、これはもう義務教育で

絶対必要なことなので全ての子ども達がある一定レベル以上に達さなければいけない、全ての国民に求められる資質能力でそこをこの門真モデルというか門真ベーシックが達成することが今の中学校3年生においてはできている。であれば、今度は一人一人の子ども達というか一人一人の先生方の授業力をいかに高めていくか、それが今後政策的に令和5年に大阪府のまたは日本全国の平均を上回るところまで持っていく一つの鍵になってくるのかなという気がいたします。

その意味におきまして、各先生方がより優れた先進校の実践を授業参観をに行ったりであったりとか、また教育センターを中心とした教員の研修をより重点的に特定の科目さらに分析を進めていきながらそういった教え方の研究といったようなものの機会をどんどん提供していくということがさらに門真市のいわゆる学校間格差がなくなった水平的になったということを更に今度は一歩上へ上げていく大きな原動力になっていくのかなということが期待できるなということが今回の中学校3年生の大阪府のチャレンジテストの分析のみに限って言うと見えてきたところが非常に嬉しいところだと思っています。

今後さらに他の学年で実施されるチャレンジテスト等についても、あわせて分析をして、教育センターの方とも協力しながら研修のあり方、そういったものを考えていきたいというふうに思っているところです。

簡単に言いますと、手を打てば必ず響いてくる。それが急激にボンと出てくるものではありませんけれども、今年は大きなそういった意味での学校間格差がなくなったと統計上しっかりと出てきているっていうところは、非常に嬉しいことだなという風に捉えているところです。

(宮本市長)

これまでの議論の中で、平均点を上げるためにはやっぱり底上げが必要だと。要は学習以前というか学力以前の課題のある子供たちに対してしっかりアプローチをかけていく中で、底割れしてしまっている状況というのは何とかカバーしていかないといけないということで、この間取り組んできたと思っています。

今、松宮委員の方からそのような面では今までとは少し違った形で学校間格差がなくなってきているというようなご発言があったんですけど、その辺の実感というか状況は、教育センターの方は把握されているというか感じておられる部分ってあるんですか。

(植原学校教育課参事)

はい。私共もそれは感じておりまして、教科によって市内で比べた時に、一

番良い学校が違ってきている。例えば全教科どこの学校が良いではなくて、教科によって変わってきている。つまり、先生方の指導力が影響しているのかなという風を感じているところです。

(宮本市長)

段々と底堅くなってきているという風に理解していいですか。

(植原学校教育課参事)

はい。

(宮本市長)

ありがとうございます。

他にご発言がありましたらお願いいたします。

(澤田委員)

今伺いました学校間格差というものが、段々少なくなってきていると聞いて非常に嬉しいことだと思っています。やはり教師の授業力をいかに上げるかっていうのが、どんな地域であってもそれは最も大切なことで、それが変わることによって学校が大きく変わるということは確かにあると思っています。

ただ、教育っていうのは門真にとってだけじゃないですけども、「門真の町を将来的にどうしていくのかというまちづくりの基礎としての教育」っていう役割というものももちろん小中学校にあるわけです。今このようにして少しずつステップアップしている中で、皆さんおっしゃるようによく基礎学力向上というのは本当に必須の問題で、それに取り組んでいかなければいけないというのは当然のことです。いわゆる認知能力ですよ。しかし、それと並行して必要なのはやっぱり子どもの心に火をつけてやる何かがなかったらそれが継続しないんじゃないかっていうことです。いわゆる非認知能力の育成です。どちらがどうっていうのではなくそれを並行して学校で取り組むということこそが私は必要じゃないかと思います。

今こうやって学力について学校が本気になって取り組もうとしているのは本当に素晴らしいことだし、それは市長をはじめ教育委員会の皆様方の努力の成果、学力向上に力を入れていきたいというその思いが伝わっているという一つの成果だなと思いますが、それをさらに進めていくために学校での取り組みに必要なのは、学力プラス子どもの心に火をつける教育ですね。そういったものがどのように行われているの検証も目に見えるような形で並行してやっていくことで、実践の整理ができさらに楽しんで学べるという状況が生まれてくるのではないかなと思います。

もちろんそのために校長のリーダーシップ等々も必要になってくるのですが、中にはそれをどうしたらいいかわからないということでなかなか進まない学校もあると思います。そこは今年度、来年度の予定を見ていましたら指導主事が学校訪問を強化するということにもなっています。ただできたできないという結果だけの判断じゃなくて、どういう風にそれをクリアしていったらいいかということも共に考え、寄り添うような形で学校に関わっていただけたら良いのではないかと思います。

以上です。

(宮本市長)

他にございますか。

(土川教育長職務代理者)

目にしたことだけですが、どこの小中学校においても体温計を通過する時に置いてあるだとか、消毒液もふんだんに置いてあって、コロナ対策をよくされているなど感じます。中学校においては、各教科で積極的に先生方がクロームブックを使って授業をされている様子を目にいたしました。小学校においては、パソコンに慣れるような取り組みが行われていて、子供たちも喜んで家や休み時間にやっているのも、たくさんの予算をつけていただけてありがたかったかなと思っています。

パソコンを使うと、世界に広がっていく知識や興味などがあると思うので、すごく良いのではないかと思います。今後、子供たちの学習意欲に期待したいところです。

非常に教育に予算を割いていただけていますが、まだまだ教育量を高めていく上では予算が必要ですので、またよろしく願います。

(宮本市長)

他によろしいですか。

(高橋委員)

私自身も3人の子どもを持つ親の立場からの意見というか要望になります。先ほど澤田先生もおっしゃいましたが、学力向上については我々が受けてきた様な詰め込みの教育であるとか強制的な教育ではなくて、生徒さん達が明確な目的意識を持って主体的に学ぶことができるような環境づくりが必要じゃないかと考えますので、今後も引き続き教育への投資を是非ともお願いしたいと思っております。

(宮本市長)

ありがとうございます。とりわけ非認知能力に関しては、当初僕自身も市長に就任させていただいた時に、まず学力よりもというか生きる力を含め非認知能力をどう高めていくかというところに一番関心を置くと同時に、子どもの貧困問題も含めて学力以前の課題を抱えている部分に関して、どういう風にフォローアップできるかというところに着眼させてもらってきました。ある程度土壌が出てきている中で学力の話は学力向上ということできちっと具体的に位置付けて動き出したのがこの2年ぐらいかなと思っています。

非認知能力云々というところに関しても、例えばクラブであったりとか他含めての課外授業であったり、学校によっては大学訪問や、門真は一応これまでの課題の中で人口が10万を超えてる割には、大学であったりだとか、私立高校含めて専門学校など、いわば公立の高校以外の教育機関がなかなかないというふうなところで、そういう方々の接点や触れ合いがないというところもあって、いろんな学生をボランティアと絡めたいろんな授業や企画であったりとか、そういうことをやりながらできるだけ大学生が門真の中でも活動できる機会というのも他の部署の中で教育委員会以外でも作ってきたりしていたわけです。残念ながらこの間とりわけコロナでなかなかこの2年間というのは、今澤田委員であったり、高橋委員が望まれる部分ですね、教育の現場でも作りにくくなっている。制約がかなり多くなっているんじゃないかなという風に考えるところでもあるんですけども、そういった部分に関して新たに取り組んでいることであったり、課題として認識されてるところがあれば教育委員会の方からご発言いただければと思いますがいかがでしょうか。

(邊田副教育長)

担当からの方がいいかもしれませんが、そういう意味もあって元々いろいろキャリア教育に関して重視して学ぶ意味を持ってもらって、自分の将来の夢や自己実現のためにしっかりと学習をしていかないといけない。価値観が移り変わる時代なので、いろんな新しい価値観が生まれてくることに対して、積極的にアプローチして学んでいって、乗り切っていくといけないというところをしっかりとやっていきたいということで、キャリア教育の方針について策定中です。やっぱりコロナの中でなかなか難しいところもあったんですけども、現場と検討してそういうものも展開しながら、学んでいくことの重要性を、何をやるにしても学びが重要だとわかっていってもらえればなというところで取り組みを進めています。

(宮本市長)

前回の総合教育会議の中でキャリア教育に関して取りまとめは出してもら

っていましたかね。今の進捗状況があればご発言いただければと思いますますがよろしいでしょうか。

(峯松教育部総括参事)

はい。キャリア教育指針ですけども、今各学校現場のキャリア教育の代表者の方と一緒に今ちょうど作成しているところです。今年度中に全て完成するのは難しく、何とか来年度中には作成をして、学校現場の方に下ろして、令和5年度からキャリア教育指針の内容を本格的に学校現場で実施するという方向で今進めているところです。

(宮本市長)

他にございませんか。

(澤田委員)

キャリアの取りまとめをされているということですが、いろいろな学校の取り組みを見せていただく中で思うのは、皆さんそれぞれやっておられるんです。何もしていないんじゃないんですね。いろんな取り組みをしているんですけども、果たしてそれが繋がっているのかなというのが私が一番心配しているところです。例えば、大学に行ったりとかいろんなところに行ったりしながら、子ども達にいろんなものを見せて、勉強させるということもされていても、それが本当にいわゆる自分のキャリアにどのように繋がっていくのか理解できているかということです。そして、その学校全体のキャリア教育の中でどこに位置づけられているのか、それが学ぶ意欲とどんな風に関わってくるのかというその学校の中の全体像が明確じゃなくてこれがいいからこれやってみよう、あそこが良いらしいから行ってみようっていう的ない感じで単発的で行われていて、せっかくやることが功を奏していない場合が多いんじゃないかということです。もったいないなとよく感じています。

ですから、今回そういうキャリア教育の指針を出されるということでありましたら、いわゆるカリキュラムマネジメントですよね。教科学習とそういった総合であったりとか道徳であったりとかいろんな実践とのマネジメントをしながら子ども達の将来にどう繋げていくのかという全体像を学校でもう1回きちっとやることで、今やることがあなたたちにはこんな風に役に立ってくるんだよということが、子どもにも保護者にも地域の方にもストンと落ちるような示し方を学校がしないといけないなという風に思っています。

新しく小中一貫校が作られるところのキーワードの中にも「将来の自分とのつながり」とか、「将来の自分をイメージして自己実現に向けた学びの意欲向上」という風にあつたのでこれだなと私は思っています。やはりそういうことに繋

げるためには、単発的な取組にするのではなくて、全てが繋がっているんですよということを分からせた上で、だから勉強が必要なんですよ、というあたりに持っていかないと、単発的にやっていたらせっかくやっていることが相乗効果を成さないのではないかと考えます。

以上です。

(宮本市長)

おそらく全てが繋がっているというイメージを校長が一番持っていないといけないのですが、学校の教員というよりかは校長がある程度その物語みたいなところとか、戦略的なところや自分のストーリーとか成功体験みたいなところも踏まえて持ってないと、たぶん伝わらないんだろうなというそのイメージみたいなところを校長自身がどこまで語れるかというのが、各教員においても個別の指導の中であっても、どことどこがどう繋がればどういう風な化学反応が起こるであるとか、単発的にこれだけやったとしても、他と繋がっているから、ちょっと上がるだけ他が上がってるから連鎖反応で繋がっていくような話もあるので、実はこの間去年も門真で行われているまちづくりの在り方やその地域のどのあたりが変わっていくかも、学校は学校だけのことしか見ないので、周辺のまちづくりのことなども、教員であったり校長も理解してほしいという話もさせてもらったりだとか、コロナの関係で生徒会の子も達と僕がコミュニケーションする機会がちょっと今年はできなかつたりとか、実際はめざせ世界へはばたけ事業等のところで、これまでやって積み重ねているところが子ども同士の中で相乗効果として一定の効果を生んでいることなども実感としてないわけではないが、この辺の流れが校長が肌感でどこまでわかっているのかなというふうに思います。ここは教育長からお願いします。

(久木元教育長)

今までの議論の感想も含めてお話したいと思います。

まず授業力についてですが、アンケート結果で授業が分かりやすいというポイントが6ポイント上昇したのは非常に嬉しいですが、問題は授業は分かりやすいけども、それが本当に定着しているかどうかというところだと思うんですね。広い意味での授業力について、本当に今の取り組みでいいのかどうかをしっかりと検証しながら、PDCAのサイクルをもって令和5年度に向けてしっかりと動きたいと思っております。

今市長がおっしゃいました校長先生の資質とか本気度の話ですが、澤田先生のお話にもございました目標を持つためにはまず校長自身が目標を持たないといけないと。校長自身の言葉で教員に伝えなければ教員は動かないと思っております。授業力についても本気度を持って示してほしいと校長会の度に

申しております、その方向性については、ほぼ校長先生も理解していただいているので、あとはどれだけ自分の言葉で伝えるかというところがこれからのポイントかなと思っております。

あとキャリア教育の部分でございますが、本当にキャリアというのは教員が一番不得手な部分じゃないかという気がしております。私が思っているキャリアというのは、ワークキャリアとライフキャリア、人生 100 年時代をどう生きるかということ踏まえたキャリア教育の指針を作らなければならないと思っております。学ぶ意欲とともにレジリエンスと言うんですか、何か失敗しても挑戦するという、門真の子供たちは失敗を怖がっていると数字が出ております。失敗を嫌がるんですね。これをなんとかクリアしたいという思いがあるので、そういう学ぶ意欲を積極的にすることと、レジリエンスですね。失敗しても立ち上がれる力や、併せてワークキャリアについては各学校で様々な取組みをされていますが、例えば我々の人生の 8 割は偶然性に基づくという研究発表もございますけども、その偶然の機会を主体的に考え、キャリアに生かしていく姿勢が大事ですよ。そのためには日頃の学習、算数や国語だけでなく美術や音楽、例えば人気 YouTuber になるためには何がいるのかという時に、やっぱりいろんな知識がなければ人気 YouTuber になれないわけですよ。そういったものをきっちりキャリア教育やいろんな授業の中で体感し、説得し、伝えていけたらいいかなと思っております、生涯を通じて自立を目指すキャリア教育の指針になればいいかなと思っております。

(宮本市長)

ありがとうございます。この他関連してご意見等ございましたらいかがですか。それでは次に移りたいと思います。

先ほど土川委員の方からありましたけども、2 点目ですが現在の GIGA スクール構想を進めさせていただいています。令和 2 年度、3 年度と教育の ICT 環境整備について予算措置を行ってきました。先般も、はすはな中学校に文部科学省からの GIGA スクール構想の現状の視察等もお越しになられ、一定の評価もいただいているところでもあります。令和 4 年度におきましてもオンライン授業の実施に向けたワイヤレスマイクの追加設備、また今後、校務支援システムがずっと課題になっていましたが、導入に向けても予算措置をしまります。各校における活用の状況や次年度の進め方等についてお聞かせ願いますでしょうか。

(久木元教育長)

GIGA スクール構想につきましては、湯川教育企画課長補佐から説明させます。

(湯川教育企画課長補佐)

教育企画課課長補佐の湯川です。GIGA スクールについて、クロームブックの活用ステップと校務支援システムについて私よりご説明いたします。

まず、クロームブックの活用ステップ資料2をご覧ください。GIGA スクールにつきましては、令和3年度に入りまして本格的な活用が始まっております。これまでの間、全ての学校が着実に活用を進めるという目的のために、どの時期までにどのようなことを進めないといけないかというところをステップとして、昨年6月の校長会で教育委員会から学校へお示しして取り組みを進めてまいりました。

具体的な活用ステップといたしましては、令和3年度は基本操作の習得から基本的なアプリの活用といった、まずは学校内での活用を進めるということを目指してまいりました。

その上で令和4年度は、応用的な活用を進めることと併せてクロームブックを家庭に持ち帰って、学習に使うということを目指して各校進めてまいりました。

また、その持ち帰りに向けた準備といたしまして、令和3年度中に家庭の通信環境の調査ですとか、持ち帰りテスト、また、必要に応じて試行の実施をしておくこととして当初進めてまいりました。

ただ、その後コロナの第5波により、夏休み明けの2学期から臨時休校が相次ぎまして、資料の裏面にあります対応を前倒しした活用ステップを改めて学校に示しております。

各学校はこれを基に、急遽先行で9月10月をもって、試行持ち帰りを実施しました。緊急時においては、令和4年度を待たず、クロームブックの持ち帰りやオンライン活用を進めております。

令和4年度からは活用スケジュールを基に、協働学習などにより学校においてより一層効果的に活用することはもちろん、緊急時のオンラインに加えて平常時にも持ち帰っての学習を市内全校で進める予定としております。

学校ではコロナの第5波、また現在も続いております第6波の影響も受けながら日々試行錯誤し、工夫や苦労を重ねながら、この活用ステップに合わせて着実に各校取り組みを進めております。令和4年度も引き続きICTを活用した学習に取り組んでいきたいと考えております。

続きまして、校務支援システムでございます。

資料の3をご覧ください。

校務支援システムにつきましては、昨年8月の総合教育会議でも概要をご説明しておりますが、令和4年度予算として導入費用を計上いただきましたので改めて今回の説明に加えさせていただきます。

学校での教育のICTというものを進めるためには、子供たちの学習環境をICT化するGIGAスクール構想と、教職員の校務をICT化する校務支援システムの

導入というものは両輪で進んでいくものであると考えております。

GIGA スクールの活用が進んでいくにつれて、教職員の中でも活用の機会が増えておりまして、活用の機運も少しずつ高まっております。令和3年度に入ってから現在学校の方で行っている校務も ICT 化できないかという相談もいくつかいただいで増えてきております。

校務の効率化や業務改善を図る仕組みの導入の必要性が高まっている状況でありますため、GIGA スクールの役割とも整理しながら、現状に合った適切なシステムの導入を行うことで、学校の教育の ICT 化の促進と教職員の負担軽減、ひいては教育の質の向上に繋がっていきたいと考えております。

私からの説明は以上でございます。

(植原学校教育課参事)

私の方からは、今年度各学校での活用状況をご説明させていただきます。資料4をご覧ください。

広報2月号に掲載しました記事を基にご説明させていただきます。

小中学校共に、新学習指導要領で求められている主体的で対話的で深い学びになるよう、子ども自身が考え、それを交流するための道具として1人1台端末を活用しております。その際、アプリとしてはクラスルームや Jamboard 等を活用しています。今年度導入した AI ドリルであるキュビナの活用も小中学校共に進んでおります。

また、教室外の活用としては小学校では、体育の跳び箱の時間に自分の跳び方を確認し、より良い跳び方を追求するために活用したり、校外学習に持って行って、事後学習のための画像を撮ったりする活用もございます。

中学校では、音楽でリコーダーの指使いの確認の活用にも使っておりました。

ご覧の資料の次のページからの資料は、ICT 活用検討会、この会は教員の中で市のために取り組みを推進しようと集まった有志でつくる会なのですが、会のメンバーが作成した資料、その中から2点抜粋したものををご用意させていただきました。

1つ目は中学校の英語での活用事例です。

子どものリーディングテストを端末に録音し、録音したデータを教員に送信する活動の事例です。

2つ目は、これは授業ではないのですが、学校で行う集会、コロナ禍でなかなか集合して行うことが厳しい現状。Meet という Web 会議アプリを活用して行う事例になります。

このような事例は他にもたくさんあり、活用が市内全小中学校で推進されるよう、教育企画課が立ち上げた門真市 GIGA スクール活用支援サイトにアップし、全小中学校の教員がいつも参考にできるようにしております。

なお、学校教育診断におけるアンケート調査の項目で「タブレットパソコンやデジタル機器などを上手に使うことができる」の項目において、子ども達の回答は肯定意見について、昨年度 70%から今年度 83.5%と 10 ポイント以上の上昇が見られております。

私からは以上です。

(宮本市長)

ありがとうございました。

ご意見等ございましたらお願いするのですが、私からですね。夏の段階で、他市においてはコロナ禍におけるオンライン授業の活用などが話題に取り上げられたというところで、門真でもオンラインでの授業参加というところで、秋口のうちにある程度沈静化、落ち着いているうちに各家庭でパソコン持って帰って、繋がる繋がらないとかいうだけじゃなく、多少オンラインも含めて活用しながらの授業、家庭学習でのパソコン利用などを進めてくださいという話もさせてもらってました。とりわけこの冬場、1月以降に感染がかなり広がって、1月後半から各学校の学校閉鎖、それから学校がちょっと全体閉まっていたのではということで、ルールをこの間何度か教育委員会で見直されて、学級ごとの閉鎖であったり、直近では1人感染者が出てきたとしても学校内で疫学調査をして休校させずに授業を継続できるように、この時に濃厚接触者で家に居る場合だったら授業に何らかの形で参画するとか、その辺のところを利用された分あったと思うんですけど、この辺の実情は実際どんな感じだったんですか。

(植原学校教育課参事)

昨年度の年末までは、そのような持ち帰り活用については試行実施をしっかりと行っていたこともあって、3学期のコロナ禍がすごく広がった時には各学校において活用が進んでいる状況です。

小学校において校長会がとった活用のアンケートを見せてもらいましたが、ほぼどの学校でも実施してるという現状を聞いております。

(宮本市長)

学年ごとの差異などはあるんですか。

(植原学校教育課参事)

そのあたりは学校の中でも学年によってというのはあります。

(湯川教育企画課長補佐)

学年ごとにとこの話がありましたが、どうしても、今小学校一年生に関してはクロームブックを1人1台配布していない状態ですので、そのあたり整備の限界で1年生はなかなか持ち帰りできていない状況です。スキルの問題などではなくできていない状況なのですが、今年度末に小学校1年生も含めて全児童生徒分のクロームブックを追加で配布しますので、そのあたりは今後解消していくかなと思います。

(宮本市長)

今の話の流れで、1年生ってクロームブックを渡した方がいいんですか。使えますか。

(湯川教育企画課長補佐)

使える使えないで言うと、かなり使える内容は少ないかと思います。

ただ、第5波の夏休み明けの時に近隣市で持ち帰りが進んだことによって、小学校1年生は持ち帰れないのですかというような保護者からのご意見も多くあるので、やはり使える環境にする必要性はあるのかなと感じます。

(宮本市長)

授業の利用度合いとしてはもう実質的にはもう3年生4年生ぐらいからじゃないと、正直言うとしんどいだろうと思うし、持って帰らずにしてもやっぱりそれなりのリスクというか、体格的に持って帰るのもそれなりに荷物も多いので難しいところもあるので、その辺りを各学校の実情も踏まえながら現実的な対応をよく考えていただいた方がいいのかなという風に思っています。

一定の学年以上でないとなかなかちゃんと利用もできない、実際持って帰ってオンライン授業やっているというものの、子どもが3時間も4時間もパソコンの前でというのは、大人でも無理やと思うんです。授業を受け続けるのって。

なおかつ、音声にしても映像にしても限度があると思うので、実際どこまで授業が成り立っているのかなっていうのを懐疑的なところは若干あるんですけども、その辺のところは、先ほどの松宮委員お話じゃないですが、学校間格差とか教師の能力による格差などがないように、かつ今言う実態的な運用がどこまでできているのかということも踏まえながらよく見守っていただきたいなと思います。

各委員の皆様からご意見があればお願いします。

(松宮委員)

先ほど少し議論になりました認知、非認知ということとも繋がるかもしれま

せんけれども、このタブレットがこういう形で導入されたこと、特にキュビナというようなドリル形式のものがありませんよね。こういったものもやはり学校間格差をなくす上での一定のレベルはあるんですけども、しかし、今後やっぱり一番大切なものはあくまでツールであるんですけども何のためのツールかという、思考する、考えるというためのツールとしての位置づけ、またそういう活用方法を研究していかなければいけないだろうと。

その一つがですね、先ほどご紹介いたしましたけども大阪府のチャレンジテストとか、それから大学入学共通テストにおいても求められている能力はこれまでの1対1対応、すなわちいつどこで誰がといったようなものを求めるような問いではなく、断片的な情報を繋ぎ合わせて、そして自分の頭の中で再構築して結論を出していくというそういったプロセスが求められています。

門真の子どもたち中学校3年生ですけども、解答例を見てみますと、やはりいつどこでという直接的にテキストの中から見つけることができるような問いに対しては、かなり頑張っているんですね。ところが断片的な情報を繋ぎ合わせて、問いを解決するという部分は非常に弱いという傾向も見えています。そういった意味において、タブレットとかそういったGIGAスクールに関わるようなものを、授業の中でいかに活用するかまた授業外でも十分運用することができると思うんですけども、そういったものとして、今日実際にこの活用事例ここに提案されておりますけれども、子ども達が自分のパフォーマンスといったようなものを英語の授業であったり、体育の授業であったり、録画するというこれは子どもたち自身が自分の中でPDCAサイクルを回すという自分の活動とか自分の理解を省察的に捉えさせるという非常に良い取り組みの事例であるという風にこれは全国的に見てもそうなんですけども、結果が出されているという風に考えています。

そういった意味で、タブレットというものをどういった形、試行するための子ども達自身がPDCAを回すことができるような、もちろん先ほど言われたような1年生にできるかどうか、1年生にできるようなものっていうものをやはりデザイン、考えていくことが期待されているという風に思っています。

以上です。

(宮本市長)

他にございますでしょうか。

松宮委員の発言に対してコメントがあれば。

教育長どうでしょうか。

(久木元教育長)

やはりあくまでもツールということで、私も以前ある研修を受けたのですが、

ICT が時間と距離を壊したということをおっしゃっていました。リアルとデジタルの両方の体験がこれから必要になってくると思いますが、これまで無理だった体験も ICT を使うことで体験できる。例えば海外の人たちと今交流しようとしてもできない。距離的にも離れています。でもそういったものを ICT を使うことによって体験できる。バーチャルではなく、リアルな体験にも使えるというようなお話だったのですが、正にそうだなということで、今後 ICT を使いながら好事例を教員にも積極的に生み出していきたいと思っておるところでございます。

(宮本市長)

他にございますでしょうか。

今のことを念頭に、今後もよろしくお願いいたします。

それでは3点目に、私の方からは学校の適正配置についてでございます。現在の進捗状況を含めて今後の進め方等をお聞かせ願いますでしょうか。

(久木元教育長)

適正配置につきましても、湯川教育企画課長補佐からお願いいたします。

(湯川教育企画課長補佐)

それでは私より学校の適正配置についてご説明をさせていただきます。

はじめに資料5をご覧ください。

現在検討を進めております第四中学校区の新しい学校づくりにつきましては、今年度当初より新型コロナウイルスの影響も受けスケジュールの変更も行いながら進めてまいりました。

資料5には、保護者や地域の皆様、学校教職員との検討状況をまとめております。

今回二つの検討の場を設けておりまして、一つめが左側の部分で、保護者、地域、学校の代表者の方々にお集まりいただき、学校づくりの大きな方針などを検討する学校設立準備会でございます。

もう一つが資料右側部分、新しい学校に関係する方を公募し、応募メンバーで構成するワークショップ「スクールツクール」でございます。こちらは主に新しい学校のコンセプトに必要な機能など整備面についての検討を行っております。

この間、それぞれ2回ずつ開催いたしまして、設立準備会につきましては、1回目の会議で、大学の先生より小中一貫教育について講演いただきました後、教育委員会より、門真のめざす小中一貫教育について説明をいたしました。また併せて新校の建設場所等についても説明をいたしております。

第2回についてはコロナの感染が拡大していたため、オンラインでの開催となりましたが、第1回に引き続き、建設場所や建設期間中の学校運営についての意見交換と併せて、通学路の現状や今後の対策について共有を行いました。

一方のスクールツクールですけれども、こちらは2回をかけて学校のコンセプトの検討を行っております。

第1回では、四中校区の現状を皆さんで共有した上で、それぞれの学校づくりへの思いを出し合い、新しい学校でできそうなことを皆さんで考えました。

第2回では意見をまとめたコンセプトのたたきをもとにさらに新しい学校で大切にしていきたいこと取り入れてみたいことを掘り下げていきましてコンセプトの検討を詳細に行っております。

また、それぞれ1回目と2回目の会議の間に、先進校視察として義務教育学校でもあります京都市立凌風小中学校への視察を行いまして、準備会スクールツクールの参加者の皆様と施設見学などを行っております。

コロナ禍ではありますけれども、多くの方にご参加いただきまして、充実した話し合いができていないかと感じております。

とりわけ、先日2月16日に実施しました第2回のスクールツクールではオンラインの開催にも関わらず、初めてオンライン会議に参加される方も含めまして、9割近くの34の方にご参加いただいております。

第2回のこちらの資料の下の画像ですけれども、グループ分けをしながら対面であれば通常模造紙に付箋を貼りながら意見を出していくところを、GoogleアプリのJamboardを使いながら皆さんの意見をシートに集約して形にしております。

スクールツクールにつきましては、今年度あと2回の開催を予定しております。検討内容や会議での様子は会議ごとにニュースレターを作成し、四中校区の保護者の皆様への学校からの配布、あと自治会での回覧により広くお知らせすることとしております。

併せて今週末に配布予定の広報3月号にも特集記事を組んだものを掲載する予定となっております。

またこの他の検討の場といたしまして、脇田小学校、砂子小学校の児童と行う子どもワークショップ、また教職員のワークショップも設けており、様々な検討の場での意見を踏まえながら今後整備の基本計画として取りまとめていきたいと考えております。

続きまして、資料6を基に今後のスケジュールの概要についてご説明をいたします。

まず施設整備面に関しまして、上段の校舎建設という欄ですが、令和8年4月の開校に向けて、令和4年度につきましては整備基本計画を策定したのち、新校舎の基本設計業務に着手し、引き続き令和5年に実施設計業務を行います。

その後、令和6年度、7年度の約2年をかけて新校舎の建設を行う予定としております。

また新しい学校運営に向けた検討体制といたしまして、学校設立準備会は開校まで引き続き定期的を開催し、通学路の安全策の検討や、新しい学校の学校名や制服、校歌などの検討を行うこととしております。

併せてワークショップにつきましても、基本設計業務の中で、新校舎の具体的な内容を決めていきますので、この場が皆さんの思いを形にしていける重要な場であると考えております。令和4年度以降も引き続き意見聴取できる場として設定していきたいと思っております。

学校関係者や地域にとって新しい学校が利用しやすく誇りに思えるものになるとともに、何より子どもたちにとってより快適でワクワクする学校となるよう引き続きワークショップ等により具体的な学校像をつくってまいります。

説明については以上でございます。

(宮本市長)

ありがとうございます。

(事務局)

高橋委員につきまして、次のスケジュールがございますので退席とさせていただきます。

(宮本市長)

それでは先ほど説明がございましたが、ご意見等ございますでしょうか。お気づきの点などありましたら、委員の皆様からお願いいたします。

この間、コロナの関係でなかなか地元に入りにくかったり、地元の方でワークショップなどの機会を作ってもらっていました。開催もご苦労いただいているところでありますけども、やはり地域の中で間接的に聞く声の中では、いろいろ課題はあるものの、自分の子供が新しい学校に通えるのかというのがスケジュール感というのがやっぱりみんな一番地元で気にしているよというのを僕のところにも聞かせてもらいます。

ですので、いろいろそれぞれのご要望も含めて課題等あるんですけど、その辺のところは一度スケジュールとしてはオープンになった以上、この辺のところをコロコロ変わってしまうとですね、新しい混乱を来すようなことも出てくるかと思うので、その辺のところをしっかりと地域と合意形成を得ながら進めていただきたいなと思っております。

四中校区の小中一貫校がうまくいくかいかにかによって、これから新しい適配等も控えてまいりますし、ある程度流れに乗ると、やはり各学校ともどこ

とも古くなっているというのも十二分に実感されてるところです。トイレの要望なんかも多かったのも、やっぱり衛生面も含めてみんな課題に思っているところでもありますし、また先般から文科省等にも行かせていただいても、やはり公共施設全体の管理の課題っていうのがみんな意識的に持っておられます。そこに対しての予算配置も国の方ではやっぱり頭悩まされてるようになってくるので、こういったところをできるだけ国、府等の連携も図りながらになりますが、そのためにはやっぱり学校のこの計画はちゃんとスケジュール通りきっちり進んでいくということが、両輪なのかなと思ってますのでよろしく願いいたします。

他にございますでしょうか。

ないようでしたら次に移りますが、この機会に教育長、教育委員の皆さんからご発言等ありましたらお願いいたします。

(久木元教育長)

先ほど、教育委員会議を開きまして、スケジュールでございますが、令和8年4月開校を目指すということを確認するとともに、義務教育学校でいくことを決定いたしました。今後、そのスケジュールに沿って、学校現場も含めて共有しながら進んでいきたいと思っています。

ワークショップなどでハード面のご意見をいただいて進めていっているわけですが、今後はソフト面というか教育理念、どういう教育をするのかというのが大事だと思っています。この辺をしっかりと内部的にも詰めながら、失敗できない学校であり、失敗は許されないと考えておりますので、しっかりと慎重かつスピーディーにやっていきたいと思っております。先ほど湯川課長補佐の話にもございましたが、子ども目線で見るとワクワクする学校、どういうキーワードが良いのかと思いつながら我々で議論をしていたのですが、子どもが行きたいなという形の行きたい楽しみがいっぱいあるよというようなイメージを打ち出していきたいなと思っております。

以上です。

(宮本市長)

他にございますか。

澤田委員、適配もご自身で経験されてきたこともありますし、教育委員として初めて総合教育会議にご出席いただいておりますので、しばらく学校現場を離れておられて、改めて全体を見られる中で、お気づきになられた点や感想などあればせっかくの機会なので発言いただければと思います。

(澤田委員)

今回こうやって四中校区が一つになるということでいろんな取り組みをされていますが、すごく恵まれているなど感じています。私たちの時は一切そういうことはありませんでした。全部学校に任されてましたので、ほとんどすべて自分たちでやってきたという経緯があったので、それは良いものを作っていく段階の一つとして素晴らしいことだなと思いました。

ただ、4年後のことになりますのでソフト面なんかに関しても、今はこんなことをしましようというあまり細かいことは決められないこともあります、市としてのこんな学校を作りたいという具体的なビジョンというものはきちり持っておかないと、意見を聞くだけ聞いてやってしまうと、それに振り回されてしまうことになりかねないので、市としてはこういう方向でいくということはきちりとどこかで抑えつつ、意見を聞くことが大事だろうなという風には伺いながら感じていました。

それと、今年の教育委員会のいろんな取り組みの成果とか来年度に向けての姿勢を見せていただくと、大変失礼な言い方ですが、ここはやっぱりやらないといけない、という強い決意を感じます。これは市長の思いが非常に熱く伝わっているのだと思いますが、教育長にも教育に対する強い思いを非常に感じております。

ただ、特に私が危惧していますのは、指導主事になる年齢層が非常に若いということで、経験値が浅いということです。だから指導主事と言いながら、失礼な言い方ですけども、何がを指導するためにやはり学校へ指導に行くということよりも、自分が勉強しに行くという姿勢でやらないといけないと思うんですね。それに指導主事は、ある意味学校に行けば教育長の代弁者です。言っていることは教育長がおっしゃっていることと同じということの覚悟を持って喋らなくてはならないとしっかりと自覚を持たせるということも必要なことです。以前は、各学校に校内研や何かあれば都度担当の指導主事を呼んで、学校はこういうものだということを見せたという経緯がありましたが、最近はそういう意味での学校への訪問というのはあるのか、どうなのかなと思っています。学力向上に関してはもちろん行かれていますと思いますが。現場に戻って、自分が管理職の立場になった時に、やっぱりそういうものを知っておく必要があると思います。学校にも協力してもらって、指導主事っていうのがすごく魅力的な仕事だなという風に一般の教員に思ってもらえるような見せ方といいますか、例えば年度当初にでも担当校に出向いて、私がここの学校の担当の指導主事ですという挨拶ぐらいはできるだろうし、どこかで会った時にもその学校の教員とは好意に話ができるような関係性を作りながら指導主事も育てていくというようにしていくことが大事なのかなと。

なり手がなかなかいないというのは寂しい話ですが、学校にも協力してもら

いながらそういったことをやっていくことが必要だと思います。

あと、様々な取り組みをやっておられて、昨年度「門真市教育振興基本計画2021」を策定されましたよね。これも見せていただいたのですが、非常に大変だったろうなと思いつつ見せていただきました。

もしもこれが具体化できれば素晴らしいことです。ただし作成された限りは、絵に描いた餅にならないような発信の仕方というものを工夫し継続的にされていくことが必要だと思います。学校でもひょっとしたら冊子をどこに置いてあるかなと危惧する部分もあります。継続的な発信、年度当初にはやはり確認という形でキャリアのこともそうですけども策定される限りは何度も学校に発信されるということは必要であると感じています。

それにつきましても、委員会がすごく努力されているのはわずかな期間でしたけれども非常に感じておりますので、維持すると同時に、引き続きこちらは応援させていただきたいと思っております。

以上です。

(宮本市長)

ありがとうございました。

他にいかがでしょうか。

今澤田委員の方からもいろいろとご意見いただく中で、先のスケジュールのことで令和8年を目指すということですが、その間の脇田と砂子と令和4、5、6、7年度と子どもたちの学習が次のステップに繋がるように、先ほどお話にもありました。新しい学校づくりといったところで仮に4年間の中で結局新しい学校に行くこともなく卒業してしまう子にとっても、良い学校生活って特異な場面だったかもしれないけども、それなりにこういう自分たちが新たな学びがあるように、学校現場においてもそれぞれの教育委員会においてもフォローアップはお願いしたいなと思っております。

(澤田委員)

それについてよろしいですか。

新校に行くことのない子供たちについての課題はありましたが、やはりその卒業していく子たちも地域のメンバーの一員なんです。だから、自分たちは行かないけれどもその地域の一員として学校を見守るという意識を持たせることはできます。指導の仕方次第です。

(宮本市長)

その辺はやはり地域活動であったりとか、当然先輩後輩なども中学校なんかになればあるでしょうし、クラブであったりもあるでしょうし、そういう機会

も含めてしっかり捉えてもらえたらなという風に思います。

あと最後に、先ほどのいろんなご意見のやりとりの中で先日からちょっと気になっていたことがあったんですけど、テレビの番組か何かで紹介されていて、ネットで見えていたんですけど、男子中学生がなりたい職業ランキングで日本とアメリカの比較がありました。日本は1位 YouTuber、2位が e スポーツプレイヤー、3位がゲームクリエイター、4位が IT エンジニアプログラマー、5位が社長。アメリカはというと、1位が医師、2位が教師、3位が IT エンジニア技術者、4位デザイナー、5位軍人とあるんです。自己実現というのは非常に良いんですが、やっぱり改めて先ほどのキャリア教育であったり、失敗を恐れる云々というような話も、教育長のお話をいただく中で、結局自分の世界観だけで終わっていて、先般、教育再生の関係の中でも志教育をもっとしっかりやっていく必要があるんじゃないかっていうような働きがある中で、世のため人のためではないけど、地域貢献であったり他者のために汗をかいたとか、ましてコロナも含めて非常事態の状況の中で、社会に役立つ人間であるとか、もう少し高い志や高い目標設定がいるのではないかと。自分のためにやっているのではなく、自分の夢を追いかけているのではなく、社会に対して自分の存在感が認められるとか、そういうことによって先ほど教育長が言われるようなレジリエンスみたいな能力が耐えられることになるのではないかと先ほどの議論の中で改めて感じたんですね。

自己肯定感というのは、自己実現だけではなく、他者から褒められたり認められたりということであって、他者から認められたり褒められたりというのは、決して本人のためだけにやることではなくて、誰かに親切にしてあげたとか、例えば学校とかクラスのために役立ったとかということが必要なんだろうなと思うので、せっかくキャリア教育というような話になって、ネットで見えて、えと思ったんですけど、改めてこの機会に考えるべきではないかなと。

先ほど澤田委員の方から、子どもたちの心に火をつけるといった話になった時に、こちらは良かれと思って火をつけようと思ってるんですけど、火がつかないんですね。なぜかというと、一定の物事を理解していなかったら次のステージを踏めない。目の前にせっかく自分の心に火がつくような目標があるにも関わらず、一定の物事を理解していなかったり考える力が足りていないから、もう1歩先が踏み込めない。だからこそ最低限の基礎学力をつけないと、新たな目標設定であったり自分の夢を実現していくことは難しいし、自分の目標や非認知能力を高める機能が出てくると、相乗効果で出てこないといけなと思うので、そこのところと、あと先ほど言うようなキャリア教育という部分における目標設定を改めて考えるべきかなと僕自身は感じているところでもあります。確かに子どもの目線に合わすことは大事ですが、本来我々が目指すべき方向性を今一度考える必要があるのではないかとこのことを僕の方から発言させ

ていただきたいと思います。

学校を含めて教育課題はまだまだ続くわけではありますが、限られた財源の中で十二分に応えられているわけではないですが、しっかり相互連携を図って参りたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

以上で、この案件につきましては終わらせていただきます。

最後に事務局の方から何かありますか。

(事務局)

来年度のスケジュールにつきましてご説明させていただきます。

来年度の開催スケジュールにつきましても、特段案件がある場合を除いては、今年度と同様の時期に年2回の開催を予定しております。開催時期が決定しましたら追って連絡いたしますのでよろしくお願いいたします。

以上でございます。

(宮本市長)

ありがとうございました。

それでは、教育長、教育委員の皆様から様々なご意見をいただきまして誠にありがとうございました。

以上をもちまして本日の会議を終了とさせていただきます。お疲れ様でした。